

妙楽大師

後閑英雄



妙樂大師

後閑英雄

みょうらくだいし
妙楽大師

昭和五十年九月三十日 第一刷発行

著者 © 後 閑 英 雄

発行者 山 崎 善 智

発行所 株式会社 第三文明社

東京都千代田区猿樂町二丁目一五番四
電話 東京 (二九四) 八七三一〇代

郵便番号 振替 東京 一一七八二一三

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 株式会社 星共社

＊万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

第一章	江南の春	五
第二章	金華山	三三
第三章	処士服のままで	六三
第四章	楊貴妃と安祿山	一〇三
第五章	詔勅	一五九
第六章	叛乱の日	一九五
第七章	風の音	二二三
あとがき		

装画 永山佳照
装帧 深井昭

妙
樂
大
師

第一章 江南の春

(1)

はげしい勢いで回転しながら、若い女が陽光の中で踊っている。三十人を越える人がそのまわりに輪をつくって、つむじ風に巻き込まれたような女の身体の、しなやかな動きに見とれていた。晩春のあたたかい日ざしにつつまれて、風も土も、すべてがかすんでいるような昼下りだったが、踊っている女のまわりにだけは、そうしたのどかさははじき返すような、張りつめた空気が流れていた。

姑蘇（蘇州）の西の城門を入ってすぐ、広場の一角のやや小高くなったところに、波斯国（ペルシャ）の産と思われる絨緞を敷いて彼女は踊っていた。波斯国か西突厥といった西域の生まれに違いない。深い緑色の大きな眼と、いくらか上向きかげんの

高く通った鼻梁を見れば、それは一目でわかった。緋色の襖うわぎに錦の袖を着け、緑綾の渾襦袴こんどうこをはいた華美な衣裳も、唐の国のものではない。靴もまた、めったに見かけない真赤な皮の靴であった。

広場を横切ろうとしていた威湛然せきたんねんと王陵平おうりやうへいは、思わず足をとめて踊りを見る人の輪にくわわった。

「胡人の娘だね。あれが胡旋舞こせんぶとかいうものだろうか」

陵平が、湛然の耳もとに口をつけるようにしてささやいた。

「たぶん、そうだと思うよ」

湛然もあいまいに答えた。二人とも故郷から出て来たばかりである。異国人の踊りなどを見るのは、もちろんはじめてだった。わきの方で、同じ西域人らしい気品のあつ顔立ちの老人が、楽器をかき鳴らしているが、その楽器もこれまで見たことがないものだったし、そこから流れ出る旋律も、耳なれない響きをもっていた。二人とも、しばらくは言葉もなく踊りに目を奪われていた。

それは太平の世にふさわしい、いかにものどかな光景であった。建国から百年余、

大唐帝国は次第に国力を充実させて、四囲の国々に君臨していたが、後に玄宗げんそうとおくり名された現皇帝の李隆基りりゅうきが帝位についてからはとくに、平和な日々がつづいていた。千里の旅行にも、護身用の短刀すらたずさえる必要がなかった、と史書は伝えている。米の値段も安く、道路にそって旅人に食事や酒を供する店がならび、駅馬も常に準備されていた。

もっとも、南船北馬といわれるとおり、揚子江下流の南にあたるこの江南地方では、水路が四通八達しているので、交通はほとんどが船で行なわれる。湛然と陵平も、故郷の荆溪けいけいからこの姑蘇まで、すべて船便を使ってやって来た。

二人とも玄宗が即位する前年の景雲二年（七一一年）に生まれたので、この年、開元十五年に十七歳になったばかりである。陵平は、長安で新しく書肆を開いた伯父の仕事を手伝いに行くのであったし、湛然は父親をようやく説得して、学問修行の旅に出ることを許してもらったのだった。

女はまだ踊りつづけている。湛然の眼はたしかにその動きを追ってはいたが、踊りとはまったく関わりのないところへ、思いは沈潜していった。

彼の父は、湛然が儒学を修めるために、各地を巡り歩くものと思っているはずであ

った。しかし、湛然のほうにはこれ以上儒教を学ぶつもりはなかった。儒家に生まれたので、彼は幼い頃から儒教の書物を読みあさり、儒学によって身を立てようとまで考えたこともあったが、一年ほど前からその気持を失ってしまっていた。

その頃、彼は、自分の生命というのは、いったいどこから来たのか、どこへ行くのか、何のために生まれて来たのか、何をなすべきかといった、この年頃の青年なら誰もがいただくような疑問を、しきりに感じはじめていた。答えが得られなくても、そのままにしてしまう人もあれば、通りいっぺんの解答を与えられて、それで満足してしまふ人もいる。しかし湛然はそうではなかった。彼はこれまで親しんできた儒教からその答えを得ようとして、さらに真剣に学んだが、結局、儒教からは満足な答えを得ることはできなかった。

そのため、彼は、それまで自分が真剣に打ち込んできた学問に対する情熱を不意に失って、しばらくは呆けたような日々を過していた。真剣に取り組んできただけに、それへの絶望もまた深かった。彼はなすすべもなく、うろろろと荆溪の山野をさまよい歩くだけであった。

かといって、その疑問を途中で投げ出して、何も考えずに人生を送るということも、

彼にはできなかった。老莊の教えにも近づいてみたが、これは妖術の研究ばかりさかんだつたので、とてもついて行けなかった。

仏教に彼が目を向けたのは、そんなある日、芳巖ほうがんという旅の僧と出会って、話を聞いてからであつた。荆溪川のほとりをゆつくりと歩いていた芳巖の姿に、湛然はどことなく心をひかれるものを感じて、思わず声をかけたのだった。左溪山に隠棲している玄朗げんろうの弟子で、金華に住んでいると芳巖は語つた。荊州の玉泉寺へ行つての歸りに、溧陽りやうから荆溪に立ち寄つたらしかった。

芳巖は、天台大師の流れをくむ一派の僧であつた。天台大師智顗の没後百三十年たつていたが、彼らはまだ天台宗と名のつてはいなかつた。天台宗という名称は、のちに湛然がつけたものだといわれる。陳から隋にかけて、その当時は最も重んじられた天台大師の教えであつたが、宗派としての勢力は、この百年ほどの間に衰微していた。とはいへ、その法燈は嚴然として伝えられ、とくに江南の一帶では帰依する人の数も多く、根強い力をたもつてはいた。

宗派としての力は弱くとも、仏教教学という面から見れば、天台の法門が最高峰であることは誰も疑うものがなかつたし、ほとんどの僧がその法門を修めようと心がけ

ていた。当時は、宗派間の対立意識もそれほど強くなかったので、律宗の僧が天台を学び、天台の僧が律や華嚴を修するといった、僧侶同士の交流もさかんであった。

川のほとりに腰をおろして、二人は日の暮れるまで話しこんだ。湛然は、芳巖の語る仏教の教え、とくに法華經と、それを明快に説き明かしたという天台大師の法門に、すっかり魅せられてしまった。自分が求めている答えが、そこにはありそうだった。芳巖もまた、ときどき鋭い問いを発してくる湛然を、じっと見つめながら、ひとつひとつその問いに答えていった。

「もし両親の許しが得られたら、ぜひ金華へいらっしゃい。仏法はまだまだ奥が深いのです。そこでもっとくわしく話してさしあげましょう」

別れぎわに、芳巖はそう言った。

「私も、そうしたいと思います。出家することは、あるいは許してもらえないかもしれませんが、今のところ、まだその決心もつきませんが、かならず、近いうちにうかがいます」

湛然は答えた。彼は新しい目的を見出した喜びが、胸のうちにわき立ってくるのを感じていた。生気が、身体中にみなぎってくるようであった。その日から、一年近く

たっている。

旅に出てはじめて、彼はそのことを陵平に打ち明けた。太湖を渡る船の中で、彼はうとうと居睡りしている陵平に向かって、いきなり大きな声で切り出した。

「話したいことがある。聞いてくれないか」

「何だい、急にあらたまって」

湛然の口調がせつばつまったような響きをもっていたので、陵平は眼をしばたたきながら坐り直した。彼は丸い顔に、いくらか落ちくぼんだような丸い眼をしているので、真剣な表情をしても、はたからはあまり真剣そうに見えない。しかし、実際には学者の息子らしく生真面目で、冗談ごとでも本氣にしてみようといたところがあり、心配性でもあった。すっかり睡氣がさめてしまった様子で、彼はまじまじと湛然を見た。

「実はね、僕はもう儒学については、これ以上学んだところで得るところは何もないと思っているんだ。これまで夢中になって儒学の書物を読んできたけれど、それは結局のところ僕の疑問を何一つ解いてはくれなかった。この上、いくら学んでも同じことじゃないか。そう思えてならないんだ」

「しかし、今ごろになってそんなことを言ったって、家族の人たちはみんな、君が儒学の勉強のために旅に出たんだと思っているぞ。……困ったな。まあ君の考えを、くわしく聞かせてくれないか」

「僕は子供のときから孔孟の教えをたたきこまれて、自分でもそれに興味をもって勉強してきた。将来、明経科の試験を受けて、官途につこうと考えたこともあったさ」

「そうだ、近所の人たちはみな、君なら間違いなく合格するだろうって、噂していた。それじゃ、官吏になるつもりもなくなったのかい」

陵平は、解しかねるといった表情であつた。高位高官の子弟は、任子^{にんし}といって親の七光りによって官吏になることができるが、それ以外の地方の豪族などの子弟にとつては、科挙^{かきよ}の試験に合格して官吏になることが、栄達^{えいたつ}への最大の道だとされている時代であつた。

科挙の科目には秀才、進士、明算、明法、明策などがあるが、湛然が一時期受けることを考えた明経科というのは、儒教古典の五経と三伝についての記憶試験である。幼い頃から儒教の書物に親しんできた彼にとって、それに合格するのは容易なことだつたに違いない。友達と遊ぶよりも書物を読むほうを好んだ彼は、すでにそのほとん

どを暗記してしまっていたからである。

湛然が黙っていると、

「そういえば、君はたしかに、子供のころから書物ばかり読んでいて、変わった子供だったっけ」

陵平は、幼年時代にそのことで、近所の子供たちと一緒にゐて湛然をからかったのを思い出したらしかった。『仏祖統紀』の湛然伝にも、児童の中にあつて超然として俗を邁^まるの志があつた、と記されている。

ゆっくりと、湛然は自分の考えていることを陵平に語った。

「——そんなわけで、僕はまず、金華へ芳巖和尚を訪ねるつもりなんだ。もちろん、父にもそのうちに話すが、しばらくは君の胸にたたんでおいてくれないか」

「そうか、わかった」

陵平は案外簡単に納得した。青白い、一見ひよわそうに見える細面の湛然だが、シンは強く、言葉として口に出すまでに、考えられるだけのことは考えるたちであつた。それだけに一度そうした決心を口にしたからには、反対しても聞きはしない。そのことを陵平はよく知っているに違いなかった。

「それにね、もうひとつ、儒学を学んで官吏になろうという氣持を失わせた理由があるんだけどね」

船を下りて、城門への道を歩きながら、湛然は声をひそめて続けた。

「官吏になって、社会のためにつくすのも悪くはないと、初めは考えていたんだよ。でもある時太宗皇帝が『天下の英雄わが彀中こうちゅうに入る』と言ったという話を聞いてしまった。多分知ってると思うが、百年も前に、五經正義という書物が出された時の話さ」

「うん、聞いてはいる」

「こういうことだ。五經正義という書物は、科擧の試験に使用される經書の、漢や魏の注釈をもとに、国家が公けに認めた解釈集だよ。つまり、それによって正統の思想による統制を図ろうとしたわけさ。それ以外の答えでは不合格になってしまうから、みんなは必死になって五經正義を学んだ。そこで、太宗皇帝は宮殿の正門のそばで、得意そうな表情で挨拶にやってくる新しい合格者を眺めて、『これで天下の英雄たちも、完全に自分の思うとおりに動かせるわい』と言ったというんだ。僕はそれを知って、完全に官吏になる氣をなくした。官吏になったところで、社会のためにつくすことなんかできやしない、皇帝のためにつくすことしかできない——もともとそのため